

歴史分野

---

東アジアにおける  
国際秩序と交流の歴史的研究

---

研究班代表

夫馬 進

## はじめに

夫馬 進

本報告書に収録した論文は、すべてで5点である。以下、各論文について簡単に紹介する。

夫馬進「ベトナム如清使范芝香の『鄱川使程詩集』に見える清代中国の汪喜孫」は、本研究班の企画で2003年12月におこなったベトナム・ハノイでの資料調査の一成果である。またここでは、ベトナムから北京に行った使節の范芝香と清朝の汪喜孫との交流について論じており、この汪喜孫はまた朝鮮から北京へやって来た外交使節とも親密な交流をしていたとする。本研究班は、東アジア全体の国際秩序と交流を研究する。本論文では、ベトナム・朝鮮・中国の一結節点ともいえる汪喜孫にかかわる新資料を紹介する。まず本論文を掲げたのは、このためである。

范金民「朝鮮人眼中的中国運河風情 - 以崔溥《漂海録》為中心」と李成珪(朴永哲訳)「明・清史書の朝鮮「曲筆」と朝鮮による「弁証」」は、ともに2003年2月22日・23日に開催された本研究班国際シンポジウムでの討議資料として提出されたものをもととする。范金民教授はこの論文をこのシンポジウムのために書き下ろしてくださった。韓国高麗大学の朴元煥教授は「崔溥『漂海録』研究述評」(『史叢』第56号、2003年3月)で早くも、范金民教授のこの研究報告が本シンポジウムでなされたことを紹介している。恐らくはインターネットの本COEホームページをご覧になって、この報告のことを知られたのであろう。「グローバル化時代」を我々自身が体験しつつあることを痛感するし、ここにやっと范金民教授の論文を公表できることになったのをうれしく思う。日本で東アジア史を研究するものは、中国語を読めるのが普通であるから、原文のまま掲げた。李成珪論文は、もと1993年にハングルで公表されたものであるが、この論文が極めて優れたものであるにもかかわらず、日本では、そして恐らくは韓国でもほとんど知られていない現状に鑑み、朴永哲教授に依頼して翻訳していただき、シンポジウムでの討議資料と

した。今回、本報告書に収録するに当たっては、再度翻訳をチェックしていただき、これには東洋史学専修修士課程修了の清水亮氏の協力を得た。

井黒忍「浅談金代提刑司 - 章宗朝官制改革の一箇側面」と櫻井智美「《文場備用排字礼部韻註》浅析」はともに、もともと日本語で書かれた論文の中国語訳である。現在の日本における東アジア史研究が抱える最も大きな問題の一つは、せっかく公表した成果を諸外国の研究者に必ずしも読んでいただけないことである。諸外国の研究者が日本語論文を引用してくれている場合でも、はたしてどこまで論旨を把握して引用してくださっているのか、疑問に思うことしばしばである。この問題を解決するためには、各研究者自身で最も関係が深い外国語に自分の論文を翻訳する能力を持つことが、一番である。そこで2年間で合計5名に自分の論文を中国語に翻訳するトレーニングをしてもらった。ここに収録した2論文はいずれもその成果である。このような目的で翻訳した成果を世界の研究者にここに使っていただけるのを、心よりうれしく思う。